
夢現実

(´_ゝ`) ← ツラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現実

【Nコード】

N3290C

【作者名】

(´・ー・´) ↑ツラ

【あらすじ】

ありえない世界存在しない世界しかし来てしまった世界何を学び、何を恐れ、何を求めるのか。予想できない夢が始まる

序章（前書き）

処女作なんであんまわくわくしないで読まないで（え

がんばって能力向上していこうと思いますんで

よろしくおねがいします

序章

見渡せば広大な平原

どこまでも続く青い空

前を向けば見えるのはきれいな地平線

後ろを向けば悠然とたたずむ森

「ここはどこ？」

真つ先に思ったのはそれだった

確か自分は夜中の2時ぐらいまでネット上をうろちよろしていて

「明日も学校だからー」という理由でベッドに入り

なかなか眠れないと頭が訴えてきたので少し漫画を読んで

で、結局その漫画を一巻から最終巻までよんでしまつて

外が明るくなつてきたのを見て本気でまずいなと思い

一生懸命、睡眠に陥る努力をして

その先の記憶はない。

本来ならば遅刻ぎりぎりに親に起こされ

ベッドから出て家をでるまで普段じゃ考えられないような速度で行

動して

ものすごい勢いで自転車をこいで

ぎりぎりで教室に駆け込むはずだったのだ。

ちよつと一気にしゃべりすぎたかな・・・

少なくとも俺はこんな大自然の代名詞のような景色は見たこともないし

こんなことにいるはずがないのだ。

だとするならば考えられる可能性はひとつ

「俺って妄想力が豊かだなー」

答えが夢と分かれば恐れることはない

むしろ自分の想像力に感心する

しかし、夢つてものはこんなに意識がはっきりしているものではない

いはずだ。

大抵は起きてから内容は忘れてしまつか曖昧な記憶になるので
実際の夢の中では傍観者みたいな内容になるはずだ。

少なくとも自分が今まで見てきた夢はそれである。

しかし今見ているこれはどうだ。

断言しよう、この内容は間違いなく起きてからも鮮明に覚えている
自身がある

ここまで夢の中で意識がしっかりとしているのだ。

というかこれではまるで現実のようだ。「夢」という感じは一切し
ない

「ふむ……」

少し考えてから少し歩いてみようという結論に達した

せつかくここまで意識がしっかりしている夢をみているのだ

楽しまなくては起きてから確実に後悔する

とりあいず前に進むか後ろに進むかそれを考えることにした。

考えて森に進むことにした

一方はどこまで見ても同じ景色、おもしろくないだろう

実際この夢は良くできていると思った

一つ一つの木々が細かいところまでしっかりと作られている。

適当に作られているものは一つもない。

触ってみれば本物のような感触を感じることができる。

実は自分はA型なのかも？というバカなことを考えながらさらに歩
を進めていると

熊に遭遇した

そつ、あの熊だ。動物図鑑に出てくるような普通の熊

しかも敵意が目に見えて分かるような殺意を含んでこっちを見ている
すごい俺の頭。熊なんかテレビの中でしか見たことないのに
まさか夢の中でここまでリアルな熊を再現してくれるなんて。
動物園に行く前に本物を見てしまった。

相変わらず相手は殺意満々でこちらを見ている。

これが現実であつたのだつたらかなりやばい状況である
が、しかし所詮は夢。恐れることはない。

といつても俺の夢創造脳内は恐怖感まで再現してくれるらしい。

頭の中では「逃げる、逃げる」と叫んでいる。

しかしもうひとつの頭は「所詮は夢なのだから」と問いかけてくる。
どちらが正しいかと聞かれたらどちらも正しいだろう。

現実ならば確実に逃げたほうがいい、しかしこれは所詮は俺が作っ
た夢なのだ

「オオオアアアアア・・・」

よく分からない呻き声の熊

熊ってしゃべるんだ

そう考えながら俺は熊に背を向け走り出していた

絶望的な状況なのに頭は嫌に冷静である。

この行動は正しい気がした

いくら夢の中だからといって熊に殺されて終わるなんてまっぴらこ
めんだ

なんてことを考えていると体が勝手に動いた。

と、同時に熊の右腕、いや左腕か？

それが俺の頭の上をかすめていったのである

振り向いてみると熊がさつきほど同じくやる気満々で次なる腕を振
りかぶっていた

あれ？熊って腕で獲物を攻撃するか？口じゃないの？

幸い体はなぜか勝手に動いてくれた・

すばやく後ろに下がったおかげで熊の腕は空を切りそのまんま地面
にめり込んだ。

めり込んだ！？

まてまて、いくら熊が力あるからってそんなに威力があるものなのか？

さすがにあれをくらって夢が終わってしまったては寝起きが非常に悪いだろう

なんて考えたら熊が次なる一撃を準備しているところだった

腕、腕ときたから次は口か？いや足か？

落ち着け、そんなゲームみたいな熊は現実ではない、いやこれは夢だけ。

動物は基本バ力である、と俺は考えている。

攻撃方法は極めて単純、ということとは確実に腕攻撃と見ていいだろう
そらきた、振りかぶってやる気満々です顔をだしながらこちらに迫ってきた

腕攻撃と分かっているなら体を見ず腕の動きだけを見ていれば多少なりとも

回避できる確率が上がるだろう

相手は突進＋腕攻撃、真後ろに下がるのは危険性が高すぎる

ということは左右どちらかによけたほうがその後の展開もやりやすくなるだろう

相手は右手を振りかぶっている。

よく考えたら俺って戦いの才能があるのではないか？

小さい頃から剣道続けてきたからそれがここで役に立っているのかも知れない。

振りかぶる直前に俺は熊の膝下を転がり込んだ。

俺が見た限り熊の身長は2M以上はあったので低いところは射程距離外だろう。

案の定かわしたこれからどうするか考える

これからどうするか考えている、思いつかない。

実際問題、人間が平面で熊から逃げ切ることはできない。

何キ口かは忘れたが熊は走るのも早いということ走ってる。

その速度は生身の人間が出せる速度ではない。

体力だって野生で育ってきた動物に週一でしか運動していないおれ
がかないっこない。

さて、どうするかと考えていればまた熊がこちらを向いて
「次こそはしとめます」みたいな感じでこちらをみている
これは本格的にまずい。

このまま行けば追い詰められそのまま殺されるのは分かりきっている
逃げられない確実に、ならばどうする？
戦うしかない。

「俺って夢の中だとてつもなく勇敢だな・・・」
実際の世界だったら逃げる以外の選択肢は出てこないだろう。
これが夢と分かっているから出てくる選択肢である。
さて、どうやって戦うか、素手なんていうのは論外だ。
通じないのは分かりきっている。

さあどうする？

「アアアアアアアアアア！！！！」

いかにして倒すか考えていたら熊がいきなり倒れた。
電池切れか？いやいや

その熊の背中には弓矢が一本刺さっていた。
弓ってこんなに威力があるものだったけ？

少なくとも頑丈な熊の皮を突き破り、しかも一撃で倒すようなもの
ではなかったはずだ。

熊が倒れた向こうには一人の女性が弓をかまえて立っていた。

ああ、彼女が倒したわけか。

せっかくだ、どうやってたら弓一本で熊を倒すことができるのか聞いて
みようじゃないか。

こちらにその女性がなにやらあせった顔でこちらに向かってきた。

まさか実はこの熊はまだ生きているとか？

それは困る、なんとか逃げ延びたというのに・・・
というかあれ？

急に体が重くなってきた

と考えた頃には自分は倒れていた。

まさか、気づかないうちに攻撃を受けていて出血していたとか？
でもってそれが原因で死んじゃうわけかおれ？

なんてなさない死に方だ・・・

できればもうちょっとかっこいい死に方がよかったなあ……

こちらはもう声を出すことができない。

まだやりたいことがあったのに。

最後に聞こえたのは

必死に叫んでいる女性の声だった。

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3290c/>

夢現実

2011年10月4日02時01分発行